

僕が九歳のときのある日、学校から帰ると家にいた祖父母は用事があるとかで出かけるところだった。両親は共働きで、帰ってくるまではまだ時間がある。祖父母は僕も連れて行こうかと思っていたようだったが、幼いながらもその用事が子供にはとてもつまらないものだということを見抜いた僕は、家で留守番をすると言い張った。九歳が一人で家に残るというのは今にして思えば不用心なことかもしれないが、すぐ近くには知り合いの家ばかりで、子供一人を一時間くらい置いておくのはそんなにばかられることではなかった。

結局祖父母は僕に留守番を頼み、「何かあればお隣のおばさんを頼るように」と言って出かけていった。僕はそれに何でもないように良い返事をしたが、頭の中はもう外に遊びに行くことで一杯だった。

当時の楽しみは虫捕りと魚捕りだった。一人では危ないと言われていたので、よく祖父母にせがんで連れて行ってもらっていた。友達と行くことも多かった。当然、一人家に残っているなんてつまらないと思った。だからこのときの僕はこっそり一人で遊びに行き、家族が帰ってくる前に何食わぬ顔で家に戻っていれば怒られることもないだろうと浅はかな考えをしていたのだった。

虫捕り網を手には、虫かごを斜めにつけて、青々とさざめく田んぼを横目に通り慣れた道路を小走りに駆けていく。家を何軒か通り越し、横

に逸れる砂利道に着く。その間誰とも会わなくてホッとした。砂利道に沿うように背が高い木々が植えられていて、夏の日差しを和らげている。砂利道は踏み込むと滑って走りづらく、自然と歩く形になった。セミの声が心地よかった。

しばらく歩くと開けたところに出る。そこは寂れた神社だった。神社と言ってもよく思い浮かべられるような立派なものではない。木造の古い拝殿が一軒ポツリと建っているだけだ。

石造りの鳥居をくぐる。誰が手入れしているか知れないそこには草が生い茂り、石畳の道を強調していた。時折風が通り抜け、サーっとした音とともに火照った身体を冷ましていく。

普段祖母に連れられて来るときと同じように、習慣で僕は一度お参りをする。拝殿に登るための木の階段は子供の体重でもミシミシと音を立てた。正しい作法なんて知らなかったが、パンパンと二回手を叩き、紅白の縄を振り回してジャラジャラと鈴を鳴らす。それを終えるが早いか、僕は草むらに飛び込んだ。

草むらにしゃがみ込むと、今まで見えていなかったものが見える。僕を見つけて慌てて逃げ出すバッタや、小さくて見えなかったアリ、草に埋もれて見えなかった石の裏にいるダンゴムシ。どれも見たことがある虫ばかりだったが、格好いい虫は雑多に虫かごに収めていった。そのまま草むらや木を巡って、夢中になって虫を集めた。今日はミンミンゼミも捕まえられて良い気分だった。

しばらくして、いつも通りの狩り場にも飽きた僕は辺りを見回す。

そこで拝殿の軒下あたりの草がほとんど生えていないところが気になった。身軽に立ち上がり、もし虫がいても驚いて逃げられるというところがないようにゆつくりと近づいていった。

草が生えていないのはどうやらそこが砂地のようになり、乾燥していたからだった。一見するとそこには何もいらないように見えたが、しゃがみ込むと不思議なものを見つけた。何やら漏斗のような形に砂地が凹んでいるところがあったのだ。僕は手近な棒をひつつかんで、恐る恐るその穴の中心を突いた。次の瞬間、そこからひとりでに砂が飛び出した。僕は驚いたが、そこに何かいるとわかってどうにか捕まえてやろうと思った。

ちょうどその一週間ほど前にクワガタに指を挟まれたのもあり、得体の知れないものに素手で触るのは怖かったので、どうにか棒で掘り起こそうと試みた。しばらく格闘しているとそいつの上半身らしきものが見えた。小さなハサミのようなものが見えた。殺してしまわないように気をつけつつ、棒で一気に掘り出した。

地上に打ち上げられたそいつはひっくり返り、足をジタバタさせていた。頭に小さなハサミを備えて、不釣り合いに大きい胴体をしていた。今思えばあれはアリジゴクだった。幼い僕は珍しい虫を見つけたと思って急いでそれを虫かごに入れた。既にバツヤやセミが入っていたから、虫かごに入れられた方はたまったものではなかっただろうが、無邪気な残酷さを持っていた僕はそんなことも考えず喜ぶだけだった。

虫かごと網を地面に置いて、アクリルでできた覗き窓からそれを観

察する。蒐集欲が満たされるのを感じていた僕だったが、本来あるべき場所から無理矢理引き剥がされたそれはおろおろと歩き回るばかりで、段々と惨めに見えてきた。

不意に冷たい風が吹く。背後の木々が揺れる。気がつけばもう西の空は茜色に染まっていた。多分祖父母が帰ってくる時間も近い。少し遠くでカラスが鳴いているのが聞こえる。昼間でも薄ら暗いこの場所は、夕方になると急に不気味に感じられた。

また風が吹く。そのときの木々のざわめきにざわりとした感覚を覚えて、振り向いた。当然そこには何もいない。だが一度感じてしまった感覚は消えてくれない。さっきまでの楽しい気分は消え去り、何かに追いついてらるるようなキュツとした恐怖感に襲われる。僕はその場から、あるいはその感覚から逃げるように一目散に走り出した。

石畳の道に戻るのも煩わしくて、草むらを突っ切つてなるべく早くこの暗がりから抜けだそうとする。石造りの鳥居を跨いだと同時に、さつきより近いところでカラスの鳴き声が響く。一瞬身を固くするが、足は止めない。そのカラスは僕を追い返そうとしているような、あざ笑っているような気がした。

砂利道に出る。足は前に進もうとするのに、砂利に足をとられてうまく進めないのかもしれない。二、三度足を滑らせたが、腰が引けていたのが幸いして転ばずにすんだ。木々に囲まれた道の先、夕暮れで染まる道が見える。あそこまで着けばもう大丈夫だ、なんて根拠もない感覚だけが希望だった。

木々を抜けた。それと同時に動く大きな影が突然視界に入り込んできた。僕は縮み上がった。が、その直後に気付く。自分の影だ。心臓は早鐘を打ち、先ほどの驚きで視界は軽く滲んでいる。一瞬止まりかけた足を前に進める。

通い慣れた道も、今は誰もいないというだけでやけに心細かった。風になびく木々や青々とした稲が、何か大きな生き物の呼吸のように見えた。

がらりと戸を開き、玄関に入ったらすぐ鍵を閉める。家にはまだ誰もいない。一人で遊びに行く作戦としては成功だが、そんなことはない。つの間にか頭から抜けていた。今日家を出たときは一人でいることにあんなにワクワクしていたはずなのに、今は一刻も早く帰ってきてほしかった。

よく怖い思いをしたときベッドに潜り込むというイメージがあるが、僕の場合はただリビングでテレビをつけただけだった。とにかく気を紛らわせるものがほしかったし、いつも人がいる空間にいた方がなんとなく安心できたというのもある。それに、何事もなかったかのように取り繕うことで怖さをなくせる気がした。

夕方にも見ているテレビ番組をボーツと見る。何も頭に入っていない。だが徐々に落ち着きを取り戻す。そういえば、これから留守の間何事もなかったかのように取り繕わないといけないのだった。そう考えていたとき、ふと自分が虫かごも虫捕り網も神社に忘れてしまったことに気付く。今から取りに行くなんて気は当然起きなかったし、

一人で外出していたことをバレたくなくて、帰ってきた家族の誰かと一緒に取りに行くというのでもできなさそうだった。

せっかく珍しい虫を見つけたのに、という思いが過るのと同時に、あの虫を捕まえたのが悪いことだったような気がしてきた。拝殿の軒下にいたのだし、神の使いか何かだったんじゃないだろうか。それを弄んだことで天罰が下るんじゃないか。そんな不安に苛まれる。

しばらくして、外から車の音が聞こえた。飛び出したい気持ちになりつつ、何もなかったかのように振る舞おうとしてじっとテレビを見つめていることにした。意識は外の音に向いていた。

がらりと戸が開く音がする。祖母が「ただいま」と言うのが聞こえた。僕は「おかえり」と返す。

「留守の間何もなかったか？」

祖父が問う。

「うん」

僕はただそう答えた。祖父の目を見る気になれなくて、視線はテレビに向いていた。幸いにも祖父はそれを不審に思わなかったらしかった。僕の心はなんだか不安と安心が同居しているようだった。

数日後、今度は友達と一緒に神社に行った。しばらく日が空いていたのと、一人じゃなかったのとで恐怖はすっかり忘れていた。何があんなに怖かったのだろうとすら思った。そもそも何かあったわけではないのだから、ある意味で当たり前なのかもしれないが。

とはいえこの数日間、虫かごと虫捕り網を置いていったことを忘れたわけではなかった。大事な遊び道具をほったらかしにしておく訳にはいかない。それらを回収するのが今日の目的だった。

友達には適当な理由で虫かごを置いてきたと言っておいた。神社に着くと、二人で虫かごを見に行った。僕は恐る恐る中を覗き込む。まだ数匹蠢いている虫がいたが、大部分は死んでいた。例のアリジゴクも死んでいた。その死骸を見ると、忘れたはずの恐怖がにわかに蘇ってくる気がした。

「なんか変な虫いるじゃん」

友達がアリジゴクを指さして言う。

「この前捕まえたんだ。あそこの砂の中にいたんだ」

友達の手前、僕は努めて明るい調子を装う。本当は今すぐにでも虫かごの中身を全部捨ててしまいたい衝動に駆られていた。友達は「ふーん」と言いつつじつと虫かごの中を覗き込んでいた。

あの日の大冒険はまだ誰にも明かして見たことがない。明かしたところで何ということもないだろうから。だが今でも時々あそこに虫かごと虫捕り網を忘れてきたままだという気がしてしまう。